



懷想錄

回顧十年（紡績科）

杜 峯 生

紡績科が出来てから丁度滿十年になる、來年の秋には母校創立二十周年記念式が行はれる筈だが、紡績科は養蠶科製絲科よりも遅れて大正八年に設置されたので、今年の三月で丁度滿十年に達したわけだ。

筆者は製糸科出だが、どういふ因縁だったか創設以來紡績科に觸れてゐるので、十年の回顧をして見るのも興味である、自分でうつつかりしてゐたが此の頃或る人に指摘されてなるほど思つた、それに最近大阪の紡織雜誌社から同社の二十周年記念に紡織回顧録を書けといふ注文があつたので、急に昔を思ひ出す氣持になつたものだ、紡績科を中心とした思出を書きたいと思ふが自然自分を中心としたことが出るのはまた止むを得まい。

自分が製糸科を卒業した頃は大戰直後で纖維工業も漸く盛んにならうとしてゐた、けれど未だ未だ製糸工場で學校出を欲するなるといふことは稀らしいものやうに考へてゐた、近頃のやうに繰糸に又検査に科學的研究が行はれてゐなかつたので製糸工場へ

(110)

行つても購買や糸捻の外特別の仕事とてなかつた、製糸技術者といふものゝ煮繭から何からすべて工女の指先技能に待たなければならなかつた時代であつたので、そこに謀叛人が六人ばかり出来上つたのである、大した理由とてない只機械をイヂクルのが好きだつたといふ丈けだが、製糸三年の特別實習を屠物研究といふ名目で紡績工場へ入り浸つて居つた、その連中は今でも皆紡績會社へ行つて相當活躍してゐるが、自分は出損つて教壇に立つてゐるしT君は紡績會社をやめて自動車屋を自營してゐるのが少し風變りだ、自分は名古屋のT燃糸會社へ往くところだつたが石倉教授からとめられて學校に残つた、その當時學校の紡績工場は長く會社にゐた實地家が多勢居て運轉してゐたものだつたが、圖らずも殆ど皆やめて會社へ轉任して残つたのは圓型の新井と前紡の冨山だけであつた、保全をやるものはゐない、チェーンジ一つ替へ得るものはゐないといふ状態で翌月の準備のために齒車をチェーンジレスピンドル・バンドをかける等すべて自ら油に染つてやつたものだ、その中に石倉教授の女房役であつた平本先生がやめられる、どうも益々忙がしくなつてきた、校長には定めし學校創立當時から紡績科設置の希望があつてこれ丈けの設備をしたことだらうと思ふが、その頃から具体的に紡績科設置の準備が進められてゐた、それ故學校としては惜しかつたのであるけれど御本人の都合もあることでまた止むを得ない、平本先生は今東洋紡で羽振りを利用して居られる、藤戸氏は日本絹織の絹紡工場で重要な位置に居られる、船越氏は蠶糸貿易商船越電勝君の御親父だが、日

東紡や日本絹綿で大久保彦左衛門といはれて技術者から恐がられたものだが今は京郡に隱居住居、

餘談に流れたが大正八年態々紡績料が出来ることになつて、石倉教授はそのお膳立をすつかりして扱箸を取る段取になつて外遊されて終つた、そのあとを委されて、といつても自分一人が委されたのぢあないけれど、とにかく第一回の學生を預つて紡績料としての授業を開始した、専門學科としては最初助教授二人丈けでその孤城を守つてゐた。折柄纖維工業界はその隆盛の頂點にあつて、紡績工場の設計とか機械据付などについて事業界の人々の往來が亦なかなか盛であつた、この頃一番困つたことは新設の紡績會社から招聘の誘惑が來ること、紡績へ行つた同窓が時々やつて來てはエライ話をして聞かせることだつた、今は代議士の戸田由美氏など最も熱心に自分を説いた、が孤城を守る自分としては事實身体二つも欲しかつたがこれに走ることにはならなかつた、同窓では鐘紡へ行つたK君、下宿で悲觀ばかりしてゐたそのK君がトテモ景氣のいゝ便りを寄越す、又先きに言つた自動車屋のT君、T君は岩代紡績へ行つたが故郷が上田なので時々歸着してはエライ話をしてゆく、自分も人間だからさういふことが羨ましいことは勿論だ、月給二十圓のプーアな自分を省みて悲觀せざるを得ない、毎夜夢は紡績工場へ走つてゐた。

そのうちに科長が米國で買つたノイル・スピニングの機械が續々と入荷して來た、第一回の學生の習習を利用して箱開りから据付迄ごたくな一夏を過ごした。

學校の創設當時からあるグリーン・ウツドの絹紡機械はすでに運轉されつゝあつたが、戰爭中兵艦の製造をやつたアイアン・ワークスがその能力を紡機の製造に向け、絹紡の機械に對してはこの學校の設備がすべてモデルになつたものだ、大阪の日本兵艦からも東京の瓦斯電氣工業からも數十人の技手が來て盛んにスケッチを行つた、この又技手達が大量な景氣で、孤城を守る筆者などはその鼻息に吹飛はされそうな騒ぎであつた、その代り紡機の製造といふ仕事に幾分の經驗を得たことを喜んでゐる。

その後また今度はモスリン會社が絹紡を兼營するといふので、その職工を三十人近く養成委託された、會社からは名古屋高工の戸村君と米澤高工出の夏井君とが學校の紡績選科に入つて研究勞々その附添に來てゐた、その三十人もの職工と學校の二十人ばかりの工手(今の業手)との多勢で、機械は全運轉、學校の工場もなかなか活氣を見せたものだ。

學校の中はさういつた目の廻るやうな騒ぎであつたがまた事業界はそれにも増した騒々しき、盛んに工場が新設される、大戦前迄は内地の原料は盛に歐洲へ輸出されたものだが、戰爭が初まつてから船腹の不足や勞力の不足から原料の買付が止まり、その代り半加工品であるペニーの輸出が増加した、ペニー會社が各地に設立されたのは皆この頃である、それがだんだん原料より製品へといふ氣運に導かれてペニー會社は絹紡全工程を行ふやうになり、糸にして伊勢崎銘仙などに製織されるやうになつて内地需要は頓に増加した。

その後起つた財界の恐慌、關東の大震災等には無論他の事業と同様相當の打撃は蒙つたが、割合に堅實な歩みを見せて今日は内地産原料の殆ど全部を消化してゐる。

紡績科も立つて十年、あわたゞしい創立から景氣の頂點に、景氣の頂點から不景氣のドン底に、種々な經路を辿つてとにかく茲まで來た、いつしよにやつて來た清水さんは一昨年教授になつた岡教授は五月に英國へ留學された、卒業生の就職も不景氣に押されて大分問題だつたがこの頃は他校に比べてもずんとい。

大底十年と言へば一つの仕事は完成されてもよい、少くとも一區切りつけてまたスタートするのもよいことだらう、自分としてもそう考へてゐるが生憎なことに世は不景氣續きだから不足勝ちな豫算を會計課と喧嘩しながら研究寮の奥深く沈没してゐる。

紡績科の卒業生は第一回九名、二回十六名、三回八名、四回十二名、五回十三名、六回十一名、七回十五名、八回十一名、合計八十七名、これに紡績科の出來ない時分に製糸科を出たもので、紡績に行き又は今やめて居つても紡績へ行つたものを舉げて見ると一回七名、二回二名、三回二名、四回七名、五回五名、六回四名、七回六名、八回三名、合計三十六名、といふことになる、それらの人達の出來事を拾つて見たら面白い漫談が出來るだらうが今はこの位で筆を擱かう。(紡績部便りは別に杉木君が書いて呉れる筈だから現狀はそれによつて知つて置きたい)。

神様の様な東寮のお爺さん

ごお婆さん

貫ちゃん

親愛なる東寮の百參拾五名の卒業生諸君。

創立以來十九年の光榮ある古き歴史を有する我が東寮は、龜屋と云ふ大家の破産と共に某銀行の抵當となり、遂に昔の南寮に移轉せなければならぬ破目に陥りました。

これよりさき來るべき二十周年記念まで、せめて東寮のあらん限りをと全生命を賭して働きつゝあつた、あの元氣な東寮の清水良吉爺さん(八十歳)とお丈婆さん(七十四歳)が極度に老衰して突然職を辭めて、目下郷里にて衰れなる晩年を送りつゝあります。

神宮皇后の様な男勝りの婆さんは、三月中旬頃學生の學年試験勉強中なので、自分がいくら好きな芝居だからと云ふて學生が一生懸命勉強して居るのに自分だけ呑氣さうに芝居を見に行くことは出來ないとして、飯よりも好きな見度い芝居を廢して、専ら試験準備中の學生のお料理に精進して居つた時であります。その頃から少し體に無理をした爲めか、偶々痔疾を煩ひ、四月十日の日か日の出町の宮櫻の風呂へ行つた時である。洗ひ場は多量の出血の爲めに紅に染まつた。入浴中の一婦人はこれに氣附き痔疾の由を告げ背中へお湯を掛けて下さいました。暫くの間休んで東寮